

静脩

1990年10月

Vol. 27, No.2

The Kyoto University Library Bulletin

京大のなかのダーウィン

理学部助教授 田 隅 本 生

学問の世界をかりに文科系と理科系とに二分するならば、図書や文献資料のもつ意味はこれらの二大分野でかなり違うようである。理科系のなかでも、研究者が多く、競争の激しい領域では、情報源としても発表の場としても、学術誌が絶大な意義をもっている。しかし、掲載された論文はやがて急速に光を失っていくから、古くなった雑誌は抜け殻のようなものだ。書庫のスペースは非常な勢で増加する“用ずみ”の雑誌で埋めつくされることになる。単行本は、やはり“生命”が短い。ためか、研究資料としてはあまり重視されない。こうした領域では、古い図書や古典的な本を大切にする気風が希薄だとしてもふしぎではない。

そのような状況のなかで、理学部動物学教室では最近、故駒井卓教授にちなむさやかな個人文庫が新設された。一見反時代的なように思われるかもしれないが、現代生物学のなかにも、昔の本や文献が価値をもちつづける領域が健在しているのである。(この文庫については、『理学部図書ニュース』の最近号でも紹介した。)

駒井先生と駒井文庫 駒井卓先生(1886-1972)とは、1921年から25年間にわたり理学部動物学教室の助教授、ついで教授をつとめ、動物分類学、

遺伝学、進化学を専攻した人である。クシクラゲ類などの海産無脊椎動物の系統分類に携わる一方、大正の末にショウジョウバエを実験対象とするメンデル/モーガン流遺伝学を米国のコロンビア大学から京大へ移入し、わが国に広めた先駆者だった。後年には、進化学の立場からヒトの遺伝学の発展にも力をつくされた。そのかたわら先生は、太平洋戦争終結の前後2年間、理学部長として困難な管理運営に当たり、1946年に定年退官された。3年後には、新設された国立遺伝学研究所の生理遺伝部長に就任、70歳までその基礎固めのために努力された。かわい体質に似ず、その時代のきびしい国情の下では考えられないほど多方面にわたって、大きな足跡を残されたのである。

先生は厳格謹直でありながら、きわめてリベラルな無教会主義クリスチャンだったこと、人々の信望が厚く、異例に多数の門下生を育てられたこと、公人として欠けるところが一つもなかったことなどが、今では伝説のように言い伝えられている。要するに、研究者としても、教育者としても、管理者としても、抜きん出た人物であった。

ところで、1986年5月の駒井先生の生誕百周年の機会にご遺族の駒井善雄氏より、同氏の費用負

担で新しい図書を動物学教室へ寄贈したいというお申し出があった。これは、図書費不足が常態化しているこの教室としては望外の朗報だった。

教室図書委員会では、駒井先生の専攻分野だった系統分類学や進化学を中心として、将来ながく価値を失わないと思われる約120冊の本（酸性紙禍でぼろぼろになった本の再購入を含む）を選定・発注し、まとめて「駒井文庫」とよぶことにした。図書室への本の受け入れはいまようやく終わったところである。経済学部「上野文庫」などとは比較にならない小規模なものだが、この種の個人文庫は京大では珍しいのではないかと思う。

ダーウィンの本と全集 駒井先生は遺伝学の大部な専門書を3点出版されたほか、数点の啓蒙書を書かれた。そのなかに、『ダーウィン傳』（1933）、『ダーウィン傳』（1943）、『ダーウィンの家』（1947）、『ダーウィン——その生涯と業績』（1959）という4点もの評伝がある。チャールズ・ダーウィン（1809-82）とは、いうまでもなく、自然淘汰説またはダーウィニズムとよばれる進化理論を提唱したイギリスの博物学者である。同一人物の評伝を生涯に4回も著わすとは例のないことだが、専攻された分野はいずれも本来は進化論に直結するものであるから、先生が終生ダーウィンに固執されたのはしごく自然なことだった。先生は少年時代以来「親戚が何かのような気がする」ほどダーウィンに親しんでおられた上、最初に師事された動物学者は、明治から大正にかけてわが国に進化論を浸透させた丘浅次郎（東京高等師範学校教授）だったのである。

このようにダーウィンにゆかりのある「駒井文庫」に新しい「ダーウィン全集」全29巻（*注）を取り入れることができたのは、幸運な巡りあわせだった。教室内で図書選定をしていたのと同じ時期に、ロンドンのピカリング社からこの全集が刊行されていた。

ダーウィンの進化理論は主著『種の起原』（1859）で発表されて以来たえずさまざまな議論的にされてきたのだが、とくにここ20年ほどは、彼の業績や生涯を多くの角度からとらえ直す仕事がかんに行われるようになった。その影響はわが国に



図1. 邦訳「ダーウィン全集」。全8巻9冊、合計約5,700ページ。教養部生物学教室に同じセットがある。（白揚社、東京、1938-40年）

も色濃く及んでおり、生協書籍部の生物学書のコーナーを一見するだけでもそのことがわかる。京大との関係では、今西錦司名誉教授の“反ダーウィン説”が有名である。こうした趨勢のなかでは、しっかりした全集への需要が大きいのは当然なのかもしれない。

外国でダーウィンの著書（原書や復刻）が出版された歴史はなかなか複雑で、全貌をつかむのは容易でない。そのなかで、『種の起原』など一部の主著だけは個別に出版されたり、あるいはペンギン・ブックスなどの叢書に入れられ、いつでも入手できるらしい。しかし全集（または選集）となると、今世紀初期にロンドンのジョン・マレイ社から出されたものは完全ではなかった上、古書としても入手が困難になっていた。わが国では、1938-40年に白揚社から「ダーウィン全集」（8巻）が出されたことがあるが、主要な8点だけを選んだものだった（図1）。1950年ごろには改造社で意欲的な「ダーウィン全集」が企画されたものの、予定された全17巻のうち約半数が刊行されただけで未完に終わった。

これら往年の全集はいずれも、どちらかといえど一般読者むけの感があったのに対して、ピカリング社の新全集はダーウィンの全著書を収め、合計約9,300ページにも達する専門研究者むけのものである。『種の起原』は、最も重要とされる初

版(1859)と第6版の最終刷(1876)がともに収録されている。

京大にあるダーウィンの著書 ダーウィンの著書
の数はかぞえ方によって異なるのだが、大きくまとめるとほぼ20点内外になる(表1)。これらのうち、わが動物学教室図書室に所蔵されていたのは12点19冊(異版の重複を含む)の原書だけだった。肝心の『種の起原』は1冊もなかった。かつて駒井先生のような大家がおられたわりには、ふしぎなほど不備だったわけである。ここに新全集が加わって合計48冊にのぼり、遅ればせながらダーウィンの全著作が備わることになった。

しかし全集を買う以上は、大学全体に同著者の本がどれほどあるのかを知っておく必要がある。もし京大にほとんどの著書があるのなら、新全集を購入することの意義は小さいことになる。そこで、附属図書館の蔵書カードで調べてみたところ、じつに意外なことがいろいろとわかってきた。

ダーウィンの著書(洋書)は、新全集を入れると、多数の異版の重複を含めて全学に221冊(分冊されたものも1タイトルを1冊とみて)もある。ただし著しい偏りがあって、『種の起原』の合計42冊が最も多く、『人間と動物の表情』の21冊、『人類の由来』の20冊などがこれに次ぐ(表1)。文字通りの冊数では、総計252冊にのぼる。

受け入れ時の登録では、これらが薬学部を除く全学部、教養部、人文研、霊長研、および附属図書館にわたる37ヵ所もの図書室に所蔵されたことになっている。法学部図書室、文学部倫理・地理・英文、医学部内科・耳鼻科・小児科、さては工学部建築などにまである。理学部数学教室に11点もあるが、これらは科学史上の名著の復刻版シリーズの一部として近年購入されたものである。

文学部西洋哲学、法学部、経済学部、医学部解剖には19世紀中に出されたドイツ語訳ダーウィン全集(全16巻、シュヴァイツァーバルト社刊)、

表1. 京大にあるダーウィンの著書(洋書)の部局別所蔵冊数 (1990年8月現在)

著 書 名	図 書 館	文 学 部	教 育 学 部	法 学 部	経 済 学 部	理 学 部	医 学 部	工 学 部	農 学 部	教 養 部	人 文 研	霊 長 研	合 計
Diary of the Voyage of H.M.S. Beagle						2		1	1				4
Journal of Researches in Geology and Natural History, Parts I, II.	1	3		1	1	5	1	4	2	1			19
The Zoology of the Voyage of H.M.S. Beagle, Parts I, II, III, IV, V.						1							1
The Geology of the Voyage of H.M.S. Beagle, Parts I, II, III.		1				4			3	1			9
The Foundations of the Origin of Species		1			1	1	1	1					5
A Monograph of the Sub-class Cirripedia, Vols. I, II, III.						4							4
A Monograph on the Fossil Lepadidae or, Pedunculated Cirripeds of Great Britain.						1							1
A Monograph on the Fossil Balanidae and Verrucidae of Great Britain.						1							1
On the Origin of Species by Means of Natural Selection, or the Preservation of Favoured Races in the Struggle for Life.	1	4		1	2	3	1	2	1				15
The Origin of Species by Means of Natural Selection, or the Preservation of Favoured Races in the Struggle for Life (6th ed.).	5	1			1	3	2	4	11				27
The Various Contrivances by Which Orchids Are Fertilized by Insects.		1			1	3	1	3		1			10
On the Movements and Habits of Climbing Plants	1	1			2	3	2	3	1	1			14
Variation of Animals and Plants under Domestication, Vols. I, II.		2		1	1	4	3	4	1	1			17
The Descent of Man, and Selection in Relation to Sex, Parts I, II.	1	3		1	2	3	2	3	2	1	2		20
The Expression of the Emotions in Man and Animals.	1	2	1	1	1	3	6	1	2	1	2		21
Insectivorous Plants	1	1			1	3	2	3		1			12
The Effects of Cross and Self Fertilization in the Vegetable Kingdom		1			1	1	2	3		1			9
The Different Forms of Flowers on Plants of the Same Species		1			1	2	2	1	1	1			9
The Power of Movement in Plants.		1			1	2	1		2				7
The Formation of Vegetable Moulds Through the Action of Worms with Observations on Their Habits						3	1	3		2			9
The Autobiography.		2			2	1	2						7
合 計	11	25	1	5	18	53	29	1	37	26	13	2	221

注: 分冊されていても1タイトルを1冊と見なす。独訳書と仏訳書を含む。*は『種の起原』第1～第5版および第6版。

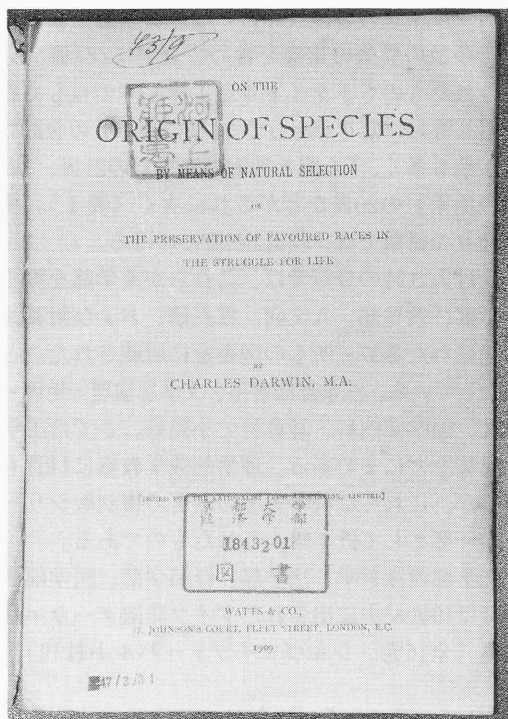


図2. 「河上蔵書」の朱印が押された『種の起原』初版リプリント版（ウォッツ社、ロンドン、1909年）のとびら。紙装本で、背はひどくすり切れている。明治43年9月購入か。（経済学部「河上文庫」）

仏文や図書館にはフランス語訳『種の起原』があることも驚異的だ。経済学部にある『種の起原』初版はなんと「河上文庫」の1冊で、故河上肇教授の蔵書だったものである（図2）。

他方、ダーウィンの本の所蔵が多くあってもよいはずの自然史系分野を含む他の教室・施設等では、これまでの動物学教室以上に貧寒なのである。燈台もと暗し、医者の不養生とはこのことだ。

ダーウィンの著作の邦訳書は京大全体で67冊あることになっている。これらの和書の大半は理科系教室や教養部に所属しており、洋書のように全学的に分布していないことは何事かを暗示している。邦訳の全集では、教養部生物に白揚社版が1セット（もと三高の図書）、農学部昆虫に改造社版の不完全セットがあるだけらしい。

『種の起原』の邦訳は1896年以来、第6版または初版の少なくとも15種の日本語版としてさまざまな出版社から出され、現在は2種市販されている。そのうちの12の版が京大内に散在しているようである。

ダーウィンの本の分布状況がわかれば、彼に匹敵するような大学者の著書が京大にどれほどあるのだろうか、という疑問がわいてくる。附属図書館のカードを一べつしたところでは、ニュートンやアインシュタインの本はダーウィンとほぼ同程度、カント、ヘーゲル、マルクスなどの著書は実に莫大な数にのぼる。しかし所蔵場所では、これらの人々の本は数物系、哲学系、社会科学系というようになんかなりはっきり偏在している。

一つの総合大学の大半の部局にわたってその著書が収蔵されているような学者は、ダーウィンのほかにないのではなかろうか。そのことには、彼の研究が自然と人間にわたる広大無辺の領域をおおっていたという事実が、漠然とであれ反映していることは疑いがない。彼の本がかつては文科系でも注目された主因はおそらく、自然淘汰によって人間社会の進化を説明しようとする“社会ダーウィニズム”が明治の中期以降わが国でも流行したことにあるのだろう。だがそれだけではなく、彼の学説や哲学が人間の本质について物語るものの意義を、かつての大学人たちが直感していたのではないだろうか。社会ダーウィニズムはやがてすたれたが、ダーウィンの本は、今日でも未解決の問題を限りなく提起しつつ、人間の意識に生物進化の観念を植えつけるという空前の仕事をしたとげた。

並び称されることもある、19世紀のもう一つの革命的な本がその役割を終えることがあっても、『種の起原』はタマムシのように、視角によって異なる光彩をいつまでも放ちつづけそうである。

* 注) *The Works of Charles Darwin*, 29 Vols., ed. P. H. Barrett & R. B. Freeman, Pickering & Chatto (Publishers) Limited, London, 1986-89.